そのひとつはハママンネングサ (*Sedum formosanum*) で，他は特産の *S. ambiflorum* R.T. Clausen である。

S. ambiflorum は最初 Merrill (1905) によって *S. australe* の学名で発表された。ところがこの学名には先行名があるため，後に Clausen (1946) は *S. ambiflorum* という新名を与えた。Fröderström (1935) は *S. ambiflorum* を暫定的に *S. Aizoon* L. (キリンソウ，広義) の異名とした。Clausen は *S. ambiflorum* をハママンネングサおよび *S. actinocarpum* Yamamoto に関連があるとみた。私は花部器官を中心に再検討した。その結果，*S. ambiflorum* は台湾特産の *S. erythrospermum* Hayata (*S. actinocarpum* は同種と考えられる) に最も近いことが判った。しかし両者は分布域が異なる。花序の大きさ，花部器官の員数，花柱の長さ等にも違いが認められる。そこで両者を同一種内の亜種とし，フィリピンのものに *S. erythrospermum* subsp. *australe* の新名を与えた。

国立フィリピン植物標本館 (PNH) とボゴール植物標本館 (BO) の標本を調べたところ，分類学上未知の1種が従来 *S. ambiflorum* と混同されてきたことが判った。これは台湾の *S. parvisepalum* Yamamoto と同種ではあるが，全体の大きさ，葉形，花弁の長さ等に違いが認められる。そこでフィリピンのものを亜種とし，*S. parvisepalum* subsp. *philippinense* と命名した。

フィリピンには現在3種のマンネングサ属を産することが明らかになった。3種とも台湾にも分布し，そのうち2種は台湾のものから亜種として区別される。他の1種(ハママンネングサ) は琉球を通って九州まで分布している。フィリピンはアジアにおけるマンネングサ属の分布の南限で，他のマレーシア地域にこの属は自生しない。特産2亜種の生育地の環境や生活の実態はほとんど判っていない。

□田川基二博士 Motozi Tagawa 1908～1977

田川基二先生は1977年7月19日急性心不全のため逝去された。享年69歳であった。

先生は1908年4月11日に大阪でお生まれになり，京都府立一中・第三高等学校を経て，1930年京都帝国大学理学部植物学科に進まれ，卒業後は約6年間大学院に在籍された。1939年京都大学副手となられ，その後講師・助教授・教授に昇任されて，1972年停年により退官されるまで京都大学に勤務された。

先生が植物学に興味を持たれたのはずい分早くからで，三高在学中にはシダ植物の研究を始める決心をされたように伺っている。京大在学中の1932年，植物分類地理学会の創設に参加され，植物分類・地理の1巻1号に処女論文の「東亜羊歯植物考察 I」を発表された。それ以後，僅かの例外を除いて，発表された著書・論文はそのほとんどがシダ植物に関するものである。植物研究雑誌にも「東亜羊歯植物雑考 (I)～(VII)」(1936～38),「羊歯類雑記 (1)～(11)」(1949～1961) をはじめ，クジャクシダ属・ギ



The late Dr. Motozi Tagawa (1908-1977)

ムノグランマ族・ゼンマイ科・ヒトツバ属に関する論文を発表されている。

研究についての先生の御姿勢は常に慎重そのもので，御自身十二分に納得されるまでは決して‘分かった’とは仰らなかったし，論文にしようともされなかった。資料標本の蒐集に際しては，1点1点の標本を研究資料として価値の高いものにするように細心の注意を注いで作成されたし，採集旅行にしても，大学を卒業された年の屋久島の1ケ月をはじめ，翌年からの3度に亘る台湾の調査も毎回 100 日に及ぶという徹底ぶりだった。それだけに，発表された論文は極めて信頼度の高いものばかりであったが，その反面，論文の形で発表されないままに終ってしまったものも多く，そのことは殊の外に悔まれることでもある。

3日前には研究室でいつものように談笑されていた先生の突然の御逝去を悼み，謹んで御冥福をお祈りする次第である。　(岩槻邦男)